HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ

学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	人買い10年
著者	菱川，善夫
引用	北海学園大学人文論集，26・27：iii-v
発行日	2004-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

人買い10年

菱 川 善 夫

どうして世の中には，こんなにも人材が不足なのか。人文学部の開設準備に追われ，大学院の申請業務に忙殺されていた時の，私の頭の中に去来していた率直な感想と言えば，そのひと言に尽きる。

机の上でさまざまにカリキュラムを組みたてることは，未来についての夢をかきたてるから，それはそれとして楽しいことだった。しかしながらその夢を現実化するためには，文部省の関門をパスできる人材を求めなくてはならない。いくらユニークなカリキュラムを描いても，その科目を担当し，責任をもって指導できる教師がいなくては，絵に描いた餅に終わってしまう。しかもカリキュラムは，一度認可されてしまえば，完成年次までそれを変更することが許されない。もし担当予定の教員が，業績不足や担当科目との不一致などの理由で不合格と判定された場合には，ただちに人を〈さしかえ〉る必要がある。人を見てカリキュラムをたてるのではなく，教育理念の実現にふさわしいカリキュラムの選択が優先するのは当然のことだから，なにがなんでも適任者を探しだして充当しなければならない。

そういう非常事態の発生は，申請業務にはつきもののように言われてきたけれど，スタート時点でこじれては，人文学部の将来構想にも大きく影響するだろう。特に，今回私と一緒に退職される村山・千葉・池田先生の在職中に，いっきに博士課程の開設まで漕ぎつけなければ，ドクターコースの申請は困難であることが最初からはっきりしていたから，むだなエネルギーに時間をさく余裕もなかった。そのためには人選を慎重にしなくてはならない。しかも有能な人を求めるためには，必ずオカネがついてまわる。給与条件も提示しないで交渉に入れないことは，火を見るより明らか

というものだ。だから私が，私自身を「人買い」と呼んで自嘲していたのも，それなりの理由があったわけである。しかし慎重の上にも慎重を期した甲斐があって，人文学部の専任教員は，ほとんどパーフェクトで通過することができた。

教員の判定結果は，書類で通知されるのではない。文部省にでむいて，直接担当官から口答で言い渡される習いになっている。科目名をひとつずつ読みあげて，担当者の合否の判定結果が伝えられるのだ。こちらは膝の上にペーパーをひろげ，その結果を書きこんでいくのだが，まるで被告席に坐って，判定を待つような心境だった。×とでたらどうするか，その不安で心臓がドクンドクンと高鳴っていたことを，いまもって私の心臓は正確に記憶している。だから無事に通過したと知った時の安堵感も，かくべつなものがあった。

もちろん，そこまでもっていくためには，たくさんの人の協力があってのことである。特に数々の申請にたずさわってきた学園本部の総務部長阿部嗣雄氏と，当時の人文学部事務長高野信宏氏の絶大な協力がなければ不可能だったと言ってよい。この御二人とは，申請業務を通して苦杯をなめあってきたため，戦友のような友情がうまれたのもありがたいことだった。考えてみれば，困難な局面に直面した時ほど，人の価値がよく見えてくるものだが，あらためてそれを教えられることになった。その意味では，人文学部の開設以後も，大学院の人事問題等で，特段の御配慮をいただいた理事長の先見性や，学長，学部長をはじめ，教職員の皆さんから頂戴した激励の言葉も，私はけっして忘れることはないだろう。退職に際してそのことを再び思い返し，心からの感謝を捧げたい。

私の人買いの仕事は，正確に言えば，村山先生に研究科長のバトンを御渡ししたところで終わった。村山先生は，英米文化学科の人買い役をになわねばならなかったから，御苦労も多かったと思うけれど，そのおかげで，英米文化の大学院も順調に軌道の上を走りだすことができたのである。10年という時間には，それだけの重い意味があったのだ。

日本文化学科の先行投資の時代が終わって，いま人文学部は，あるべき

〈新人文主義〉の理想にむかって，新しいスタートを切ったところだと言ってよい。きっと新鮮なドラマが，このさきどんどん展開していくことになるだろう。期待をもってそのドラマを見守りたい。

別れを告げるには潮時が必要だが，まことに打ってつけの潮合ではあるまいか。芭蕉は「おくのほそ道」の出発にあたって，「幻のちまたに離別の泪をそそ」ぎ，次の一句を「矢立の初」として旅にむかった。

行春や鳥啼き魚の目は泪

私も芭蕉，こと風羅坊にあやかって，感謝の心を句に託し，「幻のちまた」にむかって旅立つことにしよう。

行春や人あきなひの目も泪